

「いさばや」の現場から歴史の闇を
明らかにする詩人

日高のぼる詩集『光のなかへ』に寄せて

鈴木比佐雄

1

日高のぼるさんは一九五〇年に北海道道庁に生れ育った。その詩篇には故郷の厳しい自然の中の遅しい暮らしの息づかいが聞こえてくる。と同時に上京した東京を始めとする全国の都市や町や村そして広島・長崎・沖縄などの戦争の悲劇の場所、またアジア・中東などの多様な異郷にも向き、そこで出会った人びととの交流から生み出されたものだ。その詩作の姿勢は、異郷の風物やそこで生きている人びとの発する存在の輝きを記述している。日高さんの詩作の姿勢は、他者の懸念

な生きる戦いに親近感を抱いて、その現場の共感と感動を伝えようとする目撃者としての眼差しなのだろう。日高さんは幾つか職を経た後に新聞記者などをして現在の原水爆禁止日本協議会（原水協）の仕事に就いた。歴史に翻弄される他者の思いやその背景に分け入り、それらを他者に伝えていこうとするジャーナリストの使命感を感じさせてくれる詩篇でもある。

日高のぼるさんの素顔を初めて垣間見たのは、確か二〇〇七年二月頃に開かれた原水協の全国会議に顔を出した時だった。鈴木文子さんから日高のぼるさんを紹介されて、二〇〇六年の夏に刊行した朝鮮半島の被爆者の悲劇を約八〇〇〇行で綴った高炯烈詩集『長詩 リトルボーイ』を世に広めることを相談したのだった。すると日高さんは原水協の集まりに参加してその詩集を広めたらしいと助言してくれた。当日私は会場に

行き受付で本を販売させてもらうだけでなく、会議の最後の方で発言もさせてもらった。原爆が投下された時には、広島には約五万人、長崎には約二万人の朝鮮半島からの人びとがいて、広島で三万人、長崎では一万人が死亡し、広島での生き残った二万人の中で一万五千人と長崎での八千人が帰国し、広島では五千人が、長崎では二千人が日本国内に留まったと言われていた。それも広島にいた約五万人の多くは、韓国の陝川シムジョン出身者だったらしく、それゆえに帰国した多くの被爆者は陝川に戻ったと言われている。そんな高炯烈さんの書き上げた『長詩 リトルボーイ』の歴史的な意義を高く評価してくれて、そのような発言の機会を与えてくれた。その発言によって全国都道府県の代表者たちの多くが関心を持ってくれてその詩集を購入してくれ、きつと地元でも広めてくれたのだった。その年の八月に刊行された『原爆詩

一八一人集』についても日高さんは詩篇を寄せてくれ、また原水協の核兵器と核実験の廃絶を目指す集会で本を置かせてもらい、関心の高い人たちに広めることが出来たのだった。それまでは日高さんの詩を読む機会がなかったが、そのころから日高さんから詩誌「梢」が送られてくるようになり、「梢」が終刊した後は詩誌「風」が送られており、日高さんの詩の魅力に接するようになったのだった。

2

日高さんは現在まで四冊の詩集を刊行している。一九八四年に刊行した第一詩集『緑色のマフラー』は、序詩一篇と三章二十六篇が収録されている。序詩「略歴」を引用する。

3

いさばやが

おちややになり

めつきやになつて

しんぶんやになつた。

しんぶんやは

なんになれるのだろうか

いさばやにも

おちややにも

めつきやにもなれなかつた

男は、

サカナの骨を

のどにひっかけたまま

しぶ茶をすすり

メッキされたペンで

「いさば」は、辞書によると近世語で「五十集」という魚を扱う店や市場の商人を意味していた言葉で、「いさばぶね」は百石積みの小型回船を指していたという。また一説では「いさば」は

「窃盗」という負の意味でも使われていたそうだが、きつと悪い魚商人も回船問屋もいたので、そのような多義的な意味があるのだろう。仙台弁では「いさばや」は「魚の行商人」を指している。全国的にも「いさばや」は使用されていたらしく「磯場屋」が音韻変化して「いさばや」になつたのではないかとも言われている。日高さんは北海道の暮らしの原点を「いさばや」に置いている。日本は四方を海に囲まれていて食料の多くは海産物であつたろう。日高さんの実家が「いさばや」という魚屋や魚の行商をしていたことが、日高さ

んの生きる根源にあることが分かる。日高さんは上京し「おちやや」になり、「めつきや」になり、「しんぶんや」になつていった。そして日高さんは、「サカナの骨を／のどにひっかけたまま／しぶ茶をすすり／メッキされたペンで／詩を書いている」人になつたことを淡々と告げている。この「サカナの骨をのどにひっかけたまま」生きざるを得ない男は、きつとそのような来歴を持った人びとの臭いを本能的に感じる力があるのではないか。日高さんの他者の苦悩を察する能力は、この「いさばや」の魚の鮮度や魚の旨さを見極めるような原点に負っていたように感じられた。日高さんの詩の原点を語るには、この「序詩」の「いさばや」から始まるのが最も相応しいと感じさせてくれる。「しんぶんや」の後の物語が、日高さんの詩篇となつて私たちに提示されたのだ。

一章「切りとられた顔」六篇は、北海道の自然

と家族について触れた詩篇だ。その章タイトルの詩「切りとられた顔」は、母のアルバムの中に母とその親族たちが満州で撮つた写真がある。その写真から軍属だつた兄夫婦の顔が切り取られていたという。日高さんは、家族を通して日本人の戦争責任を考えざるを得なかつたのだろう。その重たい問いを自らに課そうとしている詩だと思われる。

二章「緑色のマフラー」十篇は、伴侶を得てからの暮らしの変化を描いた詩篇だ。妻や義父を語る詩篇は心に染み渡りしんみりさせてくれる。冒頭に短詩「愛」という詩から始まっている。「ふつと、／吹きつけてきた風を／思ひつきり抱きしめていた」という三行詩には、一人の妻を慈しみ生きていこうとする清々しさが表現されている。妻は詩人の山田典子ふみこさんなので、きつと「風」は「典子ふみこ」さんを重ねてもあるのだろう。章タイト

ルの詩「緑色のマフラー」は、妻が日高さんの好きな色を聞きマフラーを編み始めたが、冬を過ぎようとしても出来てこない。自転車に乗る時に北風に耐えて辛抱強く待っていると、風が温かくなった頃に出来た。後から妻の最も苦手なことが裁縫だったと知ったという詩だ。読んだ後に心にマフラーを巻かれたような温かい愛情を感じた。この章の中にある詩「りんご」は、暮らしを豊かにしてくれる心の在りようが絶妙に表現できている詩だ。

りんご

小さな商店街の明かりが
ともりはじめる。
ぐずる子の手をひいていく母親
駅へ急ぐサラリーマンやら

夕刊配達の自転車が行き交う
あわただしい時間。

その街の中に
いきのいい声が響いている。
はい、いらっしやい
いらっしやい——と
“い”をずうつとのばした
高い声で
せわしそうに声をかけている
果物屋のおねえさん。

裸電球に照らされた店先で
ふっと足を止めて振り向くと
いらっしやい の声が
すっと入ってきて
思わず

ひとつください。

ええ そのままっ赤なやつ。

日高さんは、ものを売ることが実は生きていく力を売ることだと認識しているのではないか。ものを買うこともまた、ものに込められた生きていく力が心が受け止めることなのだと言っている。威勢のいい掛け声もあるし、独特な気を惹くりズムもある。店員の個性的な呼び声こそが景気を左右する最も大切なものであることを告げている。

三章「四年目の決意」十篇は、日高さんの平和運動に関わる思想信条や活動の一端に触れた詩篇だ。その中でも日高さんの視線は、人間の生きる在りようを物語っていて、その人間を軽視する社会政治のあり方に異議申し立てをしている。詩で生きる思想・信条を語ることもまた詩の重要な試みの一つだと私は考えている。

3
一九九〇年に刊行された第二詩集『どめひこ』四十八篇は、祖父母や父母など家族の歴史を記しているが、それはまた二十世紀の日本の戦争に翻弄された民衆史とも感じさせてくれる。冒頭に「どめひこ」について触れているので、引用してみる。

「どめひこ——同盟罷工（どうめいひこう、ストライキ）、渡坑夫として足尾銅山へいき働いていた祖父が、待遇改善を要求する組合のストライキに参加し（一九一九、二〇——大正八、九年頃）首を切られてからの、私につながる生活の詩です。」

秋田生まれの祖父は足尾銅山の鉱夫でストライ

キに参加したという。その争議によつて職を無くして祖父母たちは北海道に渡ってきた。そんな日高さんは祖父への記憶を思い起こしながら衝撃を受けたに違いない。足尾銅山で村を追われた村人たちも北海道に渡つて行ったといわれている。同じように祖父のような鉱夫たちも北海道に渡つていったのだろう。詩「起点」を引用する。

起点

葬式の夜

よく燃えているストーブを囲んで

おばさんは話す

ばあちゃんの思い出と一緒に

じいちゃんのこと

請負い鉱夫として東北の鉱山を

渡り歩いた じいちゃん

親分はだのひとだったという
足尾の鉱山を最後に
北海道へ渡つた

どめひこで

鉱山を追われた

じいちゃん

ストーブの火に顔がほてつた

日高さんが後に平和運動を志す「起点」がこの詩に暗示されている。帝国主義戦争に向かつていく重要な弾薬の供給源として足尾銅山は存在した。谷中村の村人を追放し、鉱夫たちを劣悪な環境下で働かせた。同盟罷工をせざるを得なく決起した祖父たちの鉱夫たちの思いを日高さんは背負つていこうとしたのではないか。あとがきによるとこの詩集は祖母から取材したテープを基にして書き上げたそうだ。その家族史を通して日本の歴史の

闇が浮き彫りになつてくる思いがした。

4

一九九四年に刊行された第三詩集『付添の詩』は、妻の山田典子さんが北海道・様似での親族の結婚式直前にも膜下出血で倒れてしまい、入院し一命を取り留め、退院する日までの約二カ月のことを三十六篇の詩にまとめたものだ。冒頭には病から立ち直った後に書かれた山田さんの詩「北からのたより」が掲載されている。この詩集は、伴侶が倒れた時の夫婦愛や病院スタッフ・患者達との交流を描いたものだ。

二〇〇四年に刊行された第四詩集『パキスタン ピース・ツアー バザールの少女』は、日高さんが二十一篇、山田さんが三篇の共同詩集だ。二人の二十四篇はパキスタンの紀行詩篇だ。危険な国と言われているパキスタンを先入観なしに風土

とそこに暮らしている人びと、また難民キャンプなどを記している。

新詩集『光のなかへ』は六十二篇が序詩と四章に分かれて収録されている。序詩「約束」は友人との「広島へいこう 約束」が、「未来への道を開けていた」と語っている。日高さんの平和運動への深い思いを記した詩だ。一章「光のなかへ」十九篇は、全て広島・長崎に関係する詩篇だ。日高さんは原水協の事務局スタッフであり、きつと被爆者たちとの交流は、日常的なものだろう。被爆者との深い交流からもたらされた被爆者からの貴重な被爆体験の証言を日高さんは書き記している。かつて中原澄子さんが詩集『長崎を最後にせんば』で天草出身の十八名の長崎原爆の被災者から被爆直後のことを取材して、天草弁で詩篇を書き記した。日高さんの場合は、日常的な交流や

集会の際の交流を通して、生き残った被爆者の人生と関わりながら、日高さんに心を許して語ってくれた内容を基にしてこの十九篇の詩篇を記してきたことが特長だろう。被爆体験を後世に伝える意味で、このような詩篇の試みは重要だ。冒頭の詩「光のなかへ」を引用する

光のなかへ

証言——ヒロシマの少女の記憶から

かたときも忘れることのできない光景を
少女は瞳孔の奥のスクリーンに焼きつけていた

瓦礫に埋もれた ヒロシマの街
道の両側のおびただしい屍
地鳴りのように

もうなにも立っていないなかった

だれ? と聞き返せずに
五十年が過ぎた

街の景色は変わり
ヒロシマを忘れさせようとする輩が
原爆の痕跡をぬぐいさろうとしても
おじぞうさんは
そこに立っている
うすれた記憶のなかで
ひたすら家族の迎えを待ちつづけ
ふたたびヒバクシャをつくらせない
たちあがるひとたちの
ひとみから
あふれる 光のなかへ

水を求めるにんげんの声
手をさしのべるにんげんの群れ
そのなかに

小さく立っていた物体
おじぞうさん と思った
異臭ただようなか

少女は姉とできるだけ見ぬように
坂の下の自宅へ急いでいた

丸みをおびた黒いその物体の横を
通り過ぎようとしたとき

思いがけぬ声を聞いた
はつきりと姉の名を呼んだのだ

その瞬間ふたり
一目散に走りだした
ふたたび通ったときは

被爆直後のおびただしい屍の広島で、少女と姉は「おじぞうさん」のような黒い物体が立っているのを見た。横を過ぎる時に姉は名前をはつきりと呼ばれた。二人は一目散に逃げた。どうして「だれ?」と聞き返さなかったのだろうか。五十年間も悔い続けているという。日高さんはこの被爆した「おじぞうさん」は、今も「ひたすら家族の迎えを待ちつづけ」ているのではないかと告げている。そして私たちはその「おじぞうさん」を「光のなかへ」刻まなければならぬのであり、それが二度と被爆者を作らせないことだと語っている。このような貴重な証言が一篇一篇に刻まれている。

第二章「うりずんの風」十一篇は、沖縄についての詩篇だ。北海道出身の日高さんは、沖縄弁を隣の県のように親しみを持って語っている。大和朝廷に追われた縄文文化の名残を持つ言葉は沖縄

弁とアイヌ語やそれに影響を受けた北海道の言葉にも残っているのです、その共通性に日高さんは自覚的であるらしい。この沖縄詩篇が生き生きしているのは、虚げられてきた民衆の思いを日高さんが掬い上げているからだろう。沖縄戦の悲劇や戦後の占領政策の問題点を語るだけでなく、沖縄の神々や食べ物を語る日高さんの詩篇は、沖縄の平和を願う不屈の精神と沖縄の暮らしの豊かな魅力を語ってくれている。

第三章「海霧がのむこうに」十六篇は、故郷の北海道の詩篇だ。その中に「ざっぱ」という詩がある。この詩を読むと私は言い知れぬ生きていくためのエネルギーを感じる。

ざっぱ

北海道ではいさばやと呼ばれる魚屋を生業と

汁が飛んで服にも手にも顔にもかかる

冬にはおいは弱いのだが凍れていて空けるのが大変だった

同級生と顔を合わせるのがいやだった

リヤカーを引っ張っていると

そばを通る人は顔をしかめて避けるようにして通っていく

住んでいた集落は「国際部落」と揶揄されていた

アイヌ、チョーセン、マザリ―米軍人との間に

できた子ども―

それとシャモ* リヤカーを曳きながらちじこ

まっていた

持ち帰ったざっぱは家の裏にある大きな釜に
空け

していた

魚だけでなく日用品や野菜なども売っていた
いまでいうコンビニエンスストアのような

店だった

肥育して売るために豚を飼っていた

お得意さんへのサービスと豚のご飯のために

ざっぱ集めをしていた

ざっぱとは魚のアラなどの生ゴミだった

学校から帰ると ざっぱ集めしてと声がかか
る

リヤカーにブリキ缶を積んで店のお得意先で

ある製鉄会社の社宅をまわる

勝手口にバケツなどに入って置いてあるざっ

ぱを

移し替える それでなくても臭いのが

夏はさらに臭くて息を止めながら空ける

野菜屑なども入れ薪で炊きあげる それは父

の仕事で火の番は

豚の世話をしている祖母がしていた

ある日祖母はその中にじゃが芋を入れ

箸でとりだし皮をむいて食べさせてくれた

それはうまかった

もう四十年以上も前のことになるがあの味は

忘れない

南向きの豚小屋からは海が見えた

豚は毎日太平洋をみながら暮らしていた

*アイヌ、チョーセンに対し和人の意

「国際部落」と揶揄されていた集落は、世界の縮図のような場所だった。そこで「いさばや」を営んでいた日高さん一家の環境は、生きてゆく知

恵と他者の情報の宝庫だったと思われる。そうであればこれほどリアリティのある魅力的な詩が書けるはずがない。

第四章「ヒカリゴケ」十五篇は、「シシャモ」、「ナマコ」、「鯨刺^{げばら}」、「おから」「サクランボ」など食べ物^{食べもの}の詩篇だ。日高さんの食べ物^{食べもの}は高級食材ではなく、大衆食材だが、日高さんの詩を読むと唾^{つよ}が出てくる。北海道の酷寒の中で食べる^{たべ}る^るありがたさが身に沁みていて、食べ物への感謝をきつと忘れていないからだろう。最終に置かれた詩「ヒカリゴケ」を引用したい。妻とサクランボを食べる^{たべ}る^るミステリート^{ミステリート}ア^アに行った際の詩だ。妻に「ヒカリゴケ」のエメラルド色の輝きを見せることは、いつも「光のなかへ」踏み出していく日高さんの精神のあり方を示している。歴史の闇を「光のなかへ」明らかにしていこうと全国の現場で戦っている人たちに読んで欲しいと願っている。

ヒカリゴケ

典子がさくらんぼを食べたい というので探したらミステリート^{ミステリート}ア^アが空いていたどこにいくかが秘密の日帰りバス旅行
雨の日曜日 バスは満杯

面白いことにみんな山梨方面を予想していた
バスは関越道に入った

ええ群馬なの という声がひろがった
トイレ休憩のあと長野方面へむかう
また ええの音がひろがる

さくらんぼは坂城町の農家だった
ハウスが少なく三、四台の大型バスのため
押すな押すなの盛況だった が

あまり甘くなかった

まだ数日早いのだという

いまも目の奥で光を放っている

バスの中で横川の釜飯弁当を食べ

つぎの目的地 ヒントは花

湯の丸高原のレンゲツツジは満開だった

雨なのでみんな近くの土産物屋へ入っていった

濡れながらきのことでもないかと

歩いていると

ヒカリゴケの小さな洞窟があった

これが今回のスペシャリティと

典子と呼んで見せた

ヒカリゴケの

エメラルド色の輝きは

日高のぼる詩集『光のなかへ』栞解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2012